

『人生は開いた扇の様である』 ～ 自分の思いを超えた邂逅 ～

山梨県の甲府の岩間孝吉先生より『甲府盆地に咲く桃の花街道の写真をお届けします。』が送られて来た（画像）。大いに心が癒された。先日マザー・テレサ(1910 - 1997)、の事で、話が盛り上がった。【『マザー・テレサの学び 一鬱的時代に 一』マザー・テレサは『自分より他人を』（マザー・テレサの祈り：ドン・ボスコ社発行）と説き続けた。

『暇がなくなる時、時間を割いてあげる相手に出会えますように』

『理解してもらいたい時、理解してあげる相手に出会えますように』

『かまってもらいたい時、かまっであげる相手に出会わせて下さい』

『私が自分のことしか頭にない時、私の関心が他人にも向きますように』】

また、【樋野先生の読書遍歴：内村鑑三（1861-1930）・新渡戸稲造（1862-1933）・南原繁（1889-1974）・矢内原忠雄（1893-1961）は、何故ですか?】と聞かれた。筆者は、内村鑑三・新渡戸稲造・南原繁・矢内原忠雄に直接逢ったことの無い世代である。筆者が南原繁の名を初めて知ったのは19歳の京都での浪人時代、一人の先生に出会ったことによる。その先生は東大法学部の学生として南原繁から直接教わった人で、学徒出陣をし、南原総長時代に卒業した人である。筆者は若き日にその先生から南原繁の『歩き方』&『話し方』&『話の内容』に至るまで、人となりをよく聞かされ、『学者の風貌』を覚えさせられたものである。南原繁の著作にも親しんで50年にもなる。『…いまや進歩した文明と大衆社会の時代において…まず同胞や社会に与える効果について考えやすい。そのために、自ら究めるべきをも究め尽くさないで、人類や大衆、いままた国家の名において呼びかけるものに、直ちに凭りかかる傾向がある。…』（1968年、南原繁）の文章が妙に現実味を帯びて筆者に追ってくる今日この頃である。『何かをなす（to do）の前に何かである（to be）ということをもまず考えよということが（新渡戸）先生の一番大事な考えであったと思います』と語り、『日本の将来の命運』をかけた。人生における出会いは、出会った時に受ける影響だけに留まらず、20年、30年、50年後に影響してくることがあることを実感する日々である。『人生は開いた扇の様である』（画像）。自分の思いを超えた『人生邂逅』の恵みとなろう。



人生は開いた扇の様である

